様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２００２１

研究課題名（和文）三蘇の経学の特色と思想的時代性に関する研究

研究課題名（英文）The Reseach of Aspects and Historical Meanings of San-Su's Study of Confucianism

研究代表者
加藤　眞司（Kato, Shinji）

北海道大学・文学研究科・専門研究員

研究者番号：６０５５３０４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、三蘇父子（父蘇洵と子の蘇軾・蘇轍兄弟）の経学の関連性、及び北宋期の学術・思想情況の中における三蘇の経学の思想的位置付けを明らかにすることを目的とするものである。特に義利観（利と義の関係を問う概念）に着目して分析を行った。
　北宋期の義利観は、儒家の伝統的義利観である「重義軽利」や功利主義的な義利観等が展開されていたが、三蘇は三人共に義と利を並立させる「義利一致」という義利観を提唱した。しかし、その論理構成は三者三様であった。また、政治改革・経済発展など当時の社会情勢が反映された実学的要素を持った内容であり、その点においては、他の士大夫と性格的に同質であった。

研究成果の概要（英文）：This study mainly try to explain the relationship of the San-Su's(Su-xun and his son's Su-Shi and Su-zhe brothers) study of Confucianism and reveal the position of Confucianism in the academic situation in Northen Song at that time. Especially, this study focuses on the notion of Yiliguan(asking relationship between profit and justice).
The notion, Yiliguan, in the Northern Song, respectecl Confucianism's traditional aspects.That included "utilitarianism"and"zhongyijingli".the San-su, the scholars, propse Yiliguan called as"Yiliyizhi". However, the logic was different. It's concept was practical and reflected the social situation, for example political reform and economic policy. This inclicates that the idea had same quality of other Shi-Taifu.

研究分野：北宋期の経学研究

キーワード：三蘇　蘇軾　義利観　北宋　政治思想

１．研究開始当初の背景

(1)三蘇（父の蘇洵と子の蘇軾・蘇轍兄弟）に関しては、文学・芸術・思想・政治等多様な観点から、活発な研究が行われている。特に、蘇軾に関しては、中国においては、蘇軾の名を冠した学術誌や研討会が存在し、また関連著作も国内外で多数出版されている。本研究の対象である三蘇の経学について、彼らに関する論考は、蘇軾の経学、主に彼の『易』の解釈書である『東坡易傳』が、蘇軾の哲学を理解する際の重要文献と注目・研究されているが、論考の多くは、『東坡易傳』に見える学説を整理・紹介するにとどまっている。もちろん、三蘇の経学に関する論考は、『東坡易傳』にとどまらない。

(2)2000 年代に入り、蘇軾・蘇轍兄弟の経学に関して、以前よりは深い考察がされるようになった。しかし、多くの研究が特定の経書解釈の考察や個人の思想の概要を考察することに留意しており、中国経学史における三蘇の経学の位置づけを理解するには至っていない。また、三蘇の経学の思想的関連性や北宋の諸学者の経学との関連性を理解するには十分ではない。

２．研究の目的

(1)北宋の思想状況や政治状況の中で、当時の士大夫は義利観に関心があり、それらについて活発な議論がなされていた。また、義利観は経世思想に直結する概念でもある。北宋士大夫の共通した議論である義利観に着目して、経書解釈や奏上文等に見える蘇洵・蘇軾・蘇轍の義利観を整理、検証し、更に彼ら親子間（蘇洵と蘇軾・蘇轍）、または兄弟間（蘇軾と蘇轍）に思想的関連性を明らかにする。

(2)三蘇（父の蘇洵と子の蘇軾・蘇轍兄弟）の経学の特質と北宋諸学者の経学の特質を比較して思想的関連性を検証する。中国経学史における三蘇の経学の位置づけを試みる。

３．研究の方法

北宋士大夫の共通した議論である義利観から三蘇を含めた北宋諸学者の経学の特質と思想的関連性を検証するために、以下の三段階の研究方法を用いた。

(1) 三蘇が提示した経書解釈に見える義利観を整理し、その特色を明らかにする。更に、三蘇の間における義利観の相違や相互の影響の有無について明らかにする。

(2) 三蘇の経学とその特色に留意して、同時代の諸学者の経書解釈に検討を加え、三蘇の学術的成果とどのような思想的関連性が存在するかを解明し、北宋期の三蘇の経学の位置付けを明らかにする。

(3) 三蘇の経学が持つ時代的特質を明らかにするために、三蘇の経学以外の著作や上奏文等の諸文献を分析し、検討を加える。

４．研究成果

(1)蘇洵の義利観の特徴

蘇洵の考えに拠れば、義と利は対立する関係にはなく、共に矛盾無く両立し、一体化しているもの（義利一致）である。彼の義利観は「重義軽利」という儒家の伝統的義利観と異なっている。以下に、彼の義と利に対する概念をまとめる。①蘇洵は義を分類して、道徳的または観念的な義だけを示す行為が「徒義」であり、万民の物理的利益享受を伴う行為が「利義」とする。さらに、蘇洵は、為政者が国家統治のために実践する義として「利義」が望ましいと考える。しかし、彼は決して「徒義」を軽視しているのではなく、寧ろ義の在り方としては、「利義」よりも「徒義」の実践を理想としていることを表明している。「徒義」を政治的には不適切な義であるとするのは、それが道徳的または観念的で実益を欠く義であり、小人に受け入れられないからに過ぎず、小人が存在しなければ、その「徒義」を行うことができるとする。従って、この「徒義」は徳治主義に通じ、儒家の伝統的価値観を表していると言える。

②蘇洵が「利義」という儒家の伝統的価値観に沿わない義を提示する要因に、彼の利に対する考えがある。彼は為政者が政治的に正しく社会を誘導するために、利益誘導を政治的手法の一つに挙げている。そして、この考えを正当化するために義を二種類に分類したと思われる。つまり、政治活動において義と利は両立しなければならないということが、蘇洵の義利観に見える最大の特徴である。

(2)蘇軾の義利観の特徴

蘇軾は「義、利に非ざれば、則ち惨洌して和せず」（『東坡易伝』巻一乾卦文言伝）と解釈して、利に拠らない限りは、義は人に厳しくて冷たいものであって調和することはない。つまり、峻烈、厳格な行為は、たとえ義ではあっても、それだけでは和を乱すものであり、義に基づく行為が人々にとって利であることによって始めて「和」をなすものとなる、ということであるから、蘇軾のこの理解が蘇洵の解釈を踏襲したものであることは明らかである。蘇軾も蘇洵と同様に、義と利の関係については、義と利が共に矛盾無く両立し、対立するものではない（義利一致）とする考えを持っていたと言える。蘇軾の義と利の概念については以下のようになる。

①蘇軾は、民が義を好む存在ではないので、民に対して、政治的には道理としての義を天下の万民に示すだけでは、万民に支持されないとして、天下に「義」を実現するために、民を「利」によって誘導した方が良いと考える。しかし、彼は一方で、義を先にして利を後にしなければならないとする。この蘇軾の

考えは、論理的には利より義を重視しているように見え、利を欠く義のみでは人に受け入れられないとする『周易』乾卦文言伝の解釈に見える蘇軾の考えと異なっている。
②上記のように義に対して、二通りの考えが存在する理由は、蘇軾の利に対する考えにある。彼は、政治的手法として為政者が経済的利益を放棄して、民に与える方が良いという考えがある。つまり、支配者階級の利益より、民の利益を優先することが国家の義であるという論理構造が形成されている。以上より、蘇軾の義利観は、単に民を利益誘導による政治手法と捉えるのではなく、支配者階級に政治的倫理を求める概念だと言える。

(3)蘇轍の義利観の特徴
為政者が無私の境地で政治に臨み、不用意な政策は行わないことが義であり、それによって自然と政治的目的が達成されることが利であるという論理構造（義利一致）になっている。具体的には、君主が無私の境地で、自身が質素倹約に努め、国家は不必要な財政支出を避け、それによって自ずと民の経済的負担が減り、民が豊かになって国家も豊かになるのである。蘇轍の義利観における、意図的に利益を追求せず無私であれば、意図しなくても利益が生じるという論理構造は、「無為にして為さざる無し」のような『老子』の影響を受けている。

(4)三蘇の義利観の関連性とその要因
①関連性
三蘇の義利観に於いては、義と利が共に矛盾無く両立し、対立するものではないということ（義利一致）が共通認識となり、基礎となっている。但し、三蘇の義利観の内容については、大きく異なる。蘇洵の義利観では、「義利」「利義」という用語に示されるように、義と利の概念が非常に近いものとなっている。また、身分に応じて人の利益を計り、それに沿って人を誘導するという主体性が現れている。しかし、蘇軾・蘇轍兄弟の義利観では、義を行う主体者である為政者による利益誘導を説かない。為政者側が利を放棄すること、それが義であり、為政者が行った義が民にとって有益であれば、それが民の利となるのである。蘇洵の義利観と比較すると、蘇軾・蘇轍の義利観は、為政者による利の放棄、或いは無私という点でやや主体性が薄く見えるが、常に民の利を意識していることがわかる。
②要因
蘇洵の義利観では利益誘導を容認し、蘇軾・蘇轍の義利観では民を意識した内容である理由は、民に対する認識と、彼らが活躍した当時の時代背景にある。まず、民に対する認識だが、三者ともに、民が愚者であり、その民が国家の基礎構成要因であることを強く認識していることにある。次に時代背景であるが、三蘇が活躍した時代は、北宋王朝の仁宗期末から徽宗期初頭に当たり、この時代には王朝が抱える諸問題が顕在化し、特に、夷狄に対する軍備拡大、官僚組織の肥大化、国家財政の悪化という問題は、三蘇も含めて当時の士大夫達が解決しなければならない問題であった。特に、財政の問題は深刻であり、義利観が税制問題とも関わることであれば、義理を論じる際に彼らが民を意識しないことはないと思われる。つまり、利益追求に貪欲で愚かな民の欲求を満たすことができなければ、国家は不安定になり、滅亡という事態になる可能性があればこそ、蘇洵の義利観が利益誘導を容認するものとなり、蘇軾・蘇轍の義利観が民を意識するものになったと考えられる。また、蘇軾・蘇轍の義利観が消極的に見えることについては、王安石の政治改革の影響が考えられる。王安石は、先に挙げた諸問題を解決するために、新法を次々と施行したが、その多くが民の負担を増大させるという結果を招くこともあった。彼ら兄弟は、大体において新法に反対であった。彼らの義利観は、彼らの経済思想にもとづく新法批判の表現の一つと見なすことができる。三蘇の義利観は、彼らが当時の社会・政治の現実を分析して構築した見解と言える。

(5)他の北宋士大夫達の義利観
①「重義軽利」型義利観
胡えん（「玉」へん＋「爰」）・孫復・石介・司馬光・程頤の義利観は、義と利を比較した場合は利より義を重視する孟子以来の伝統的「重義軽利」（又は「先義後利」）型義利観を提示している。孫復は、利は夷狄の道として否定するが、他の士大夫は利を完全に否定しない。胡えんは、「性（人の本性（仁義礼智信））を正す」ことによって、はじめて「美利（乾卦文言伝の句）」としてその利（営利活動）を評価する。石介は、支配者階級の資質が、その下につく者の性に影響を与えると考える。范仲淹は、政治的には、国家が利を興すという積極的な富国政策を求めるが、経書解釈（「易義」益卦の解釈）においては、下つまり民を富ますことを主張している。功利的な主張もすれば、儒家の伝統的価値観に基づいてのべることもあり、このことは彼の義利観の形成に天人相関説が関係しているのではないかと考えられる。
②「功利主義」型義利観
李覯の義利観は、孟子の説く「重義軽利」の義利観を否定し、より一層強く利を求める義利観を展開しており、彼の義利観は功利主義的傾向を有する概念である。
③「義利一致」型義利観
王安石・蘇軾・蘇轍の義利観は、彼らの義利観は義と利を両立させる「義利一致」的性格を備えたものである。但し、蘇軾・蘇轍が民の利を優先する内容に対して、王安石は国富論を基盤とした義利観である。
北宋士大夫達の義利観の形成は、政治的立場、学術的立場に影響を受けて形成されるので

はなく、当時の社会情勢に対する認識によって形成されることがわかる。

(6)北宋士大夫達の人間観
彼らの義利観の形成要因として、人間観（性説）、つまり人間の本質は何か（善か悪か）ということと義利観の関係を考察してみた。性説は、性善説、性悪説、性善悪混在説、性無善無悪説、性三品説の五説が存在する。
①性善説（又は性善説に近い学説）を唱える者には、胡えん（「玉」へん＋「爰」）・孫復・石介・范仲淹・程頤であり、彼らは義利観においては、まず「重義軽利」型の義利観を主張する。
②性悪説を唱える者はいない。しかし、あえてこの立場に近い者を挙げれば、蘇洵を挙げることができる。義利観は、「義利一致」型。
③性善悪混在説を唱える者には、司馬光が存在する。義利観においては、まず「重義軽利」型の義利観を主張する。
④性無善無悪説を唱える者には、蘇軾・蘇轍・王安石が存在する。義利観は、「義利一致」型。
⑤性三品説を唱える者には、李覯が存在する。義利観は、「功利主義」型。
上記を概観すると、性説と義利観の組み合わせにおいて、慶暦の改革に政治家として参加、又は同時代に学者として活躍した士大夫には、性善説と「重義軽利」型義利観の両方を唱えた者が多い（李覯は除く）。その後の元豊の改革期に活躍した士大夫は、王安石・司馬光・蘇軾・蘇轍であり、様々な主張をしている（程頤は除く）。本研究では、諸改革との関係に深く踏み込まなかったが、慶暦の改革と新法の改革の関係を考察する上で、一つの検証すべきテーマであると考えられる。

(7)三蘇の経書解釈に見える義利観の思想史的位置づけであるが、大枠において、義と利を矛盾なく並立させるという義利観は、唐代の柳宗元にも見えている。しかし、政治、特に財政問題と関わってくると、表面的には同じに見えても、蘇洵と蘇軾と蘇轍の三者の論理構造は異なる。三人の義利観の特徴から考察すると、彼らの経書解釈は、社会情勢の認識による経書の読み替えを行い、その正統性を保証するものである。特に、蘇軾の経書解釈は「人情に近い」という評価がなされている（『四庫提要』）が、このことは、彼の経書解釈に見える義利観にも表れている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
①<u>加藤眞司</u>、北宋士大夫の義利観、中国哲学、第 43 号、2015、印刷中、査読有

②<u>加藤眞司</u>、三蘇の経学、中国哲学、査読有り、第 40 号、2012、pp89－114

〔学会発表〕（計１件）
①<u>加藤眞司</u>、経書解釈に見える北宋士大夫の性説、北海道中国哲学会第 45 回大会、2015 年 8 月 30 日、北海道札幌市、北海道大学

６．研究組織
(1)研究代表者
加藤　眞司（KATO, Shinji）
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：60553047